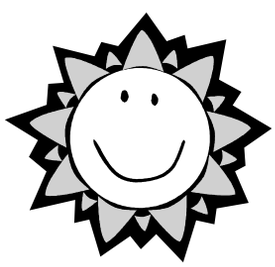
3　推進目標と推進項目

青少年の育成ビジョンに向かって、社会における一人ひとりが具体的に行動していくことが重要になってきます。ここでは、ビジョンを達成するための推進目標をかかげ、さまざまな角度から推進してほしい項目を設定しています。

次ページは、ビジョン→推進目標→推進項目→具体的行動の関係と、具体的行動にあたってのそれぞれの意識を表したものです。



青少年の育成ビジョン

＜キーワード＞

「社会性」を身につけ、ひとりの人間として「自立」していく

そのために

推進目標

心と体のバランスづくり

心と体のバランスが取れていないと、どこかにひずみがでてきます。

そのために

推進項目

①家庭と社会とをつなぐパイプを構築

②「食べること」と「食文化」の伝承

③現代版「子育ての知恵袋」の活用

④家族との「心と体」のふれあい増加

⑤利便性と危険性を自覚しての積極的なＩＴの活用

⑥「心と体」の居場所づくり

⑦「勉強」「運動」「さまざまな体験」の意義を再認識

⑧豊かな感受性と表現力の育成

⑨事前の知識提供と相談体制の充実

⑩学校を中心に起こりうる青少年の現代的問題への取り組み

⑪青少年を育む環境（まち）づくり

⑫青少年を見守る社会の連携強化

⑬年代の離れたさまざまな立場の人との交流を促進

⑭可能性を秘めた若い力の採用と積極的な社会への貢献

⑮「文の京」の地域文化を次世代へ伝承

そのために

それぞれの行動！事業の実施など

心と体と学を「成長」させる
学校 児童機関

心と体の「基礎」をつくる
家庭

青少年・家庭・学校を「見守る」**住民**

「先輩社会人」としての
お店・事業所

具体的行動にあたってのそれぞれの意識

「文の京」を彩る
大学

（1）推進目標

自立と社会性を身につけるために…

心と体のバランスづくり

「心と体のバランスがとれている」ということは、すなわち青少年が健やかに成長しているということであり、それは私たちおとなの願いでもあります。心と体のバランスがとれていないと、青少年時期特有の悩みを解決したり、ストレスをうまく発散させることができません。おとなと違い、幼児期から子ども時代の体の成長は著しく、個人の差はあるものの高校生等の年代になれば、ほぼおとなと同じに成長します。しかしながら、心の成長という面では、さらに個人による成長の差が顕著になり、青年期を迎えても、おとなになりきれない人がいることは現実問題です。成長の段階は、個人によって差があって当然ですが、心も体と同様、バランスよく成長していくことが望まれます。悩みながらも様々な人との出会いや体験を通して青少年が成長し、社会性を備えた一人の人間として自立していくために、周りの社会は、**見守り、時には手を差し伸べていくこと**こそが必要です。

（２）推進項目

育成ビジョンのキーワード「自立」「社会性」に向かって、推進目標を達成するために、推進項目として、１５の項目を設定しています。「家庭」「学校」「地域」「行政」等のすべきことといった分類を特にはせず、**社会全体で取り組めるよう設定**しました。その中から、特に力を入れていくべき項目を重点行動として取りあげています。事業によっては、社会参加を目的に行っているものもありますが、参加させることで社会性を身につけることは、どの項目でも当てはまるので、今一歩、踏み込んで項目を推進してほしいと考えます。

①「ありがとう　家族ぐるみの　おつきあい」

家庭と社会とをつなぐパイプを構築

現状と必要性

文京区は、生活するにはとても便利な地域です。近年、区内の各所にマンションが建設され、多くの住民が転入してきています。ところが、**「同年代の親どうしの付き合いはまだしも、近所づきあいや町会等の当番などはできるだけ避けたい！でも、子どもは積極的に社会とふれあってもらいたいから、お祭りなどには行きたいかな…」**と思っている方、多くいませんか？おとなどうしの交流や、家族ぐるみでのつきあいがなければ、子どもは安心して社会に出ていけません。核家族であれば、地域での子育て援助や異年代との交流は、青少年にとって重要であることはもとより、保護者自身にとっても子育てのサポートになり得ると考えます。積極的に地域の中へ家庭が出ていってほしいと考えます。社会の側も、家庭が社会の中に出てきやすい体制を作る必要があります。

この項目の目指すところ

個々の家庭が「この地域で生活している」という自覚をもつことができ、子どもと家庭の両方の成長を社会全体が見守っている“ぶんきょう”

②「いただきます　家族そろって　おいしいね」

「食べること」と「食文化」の伝承

現状と必要性

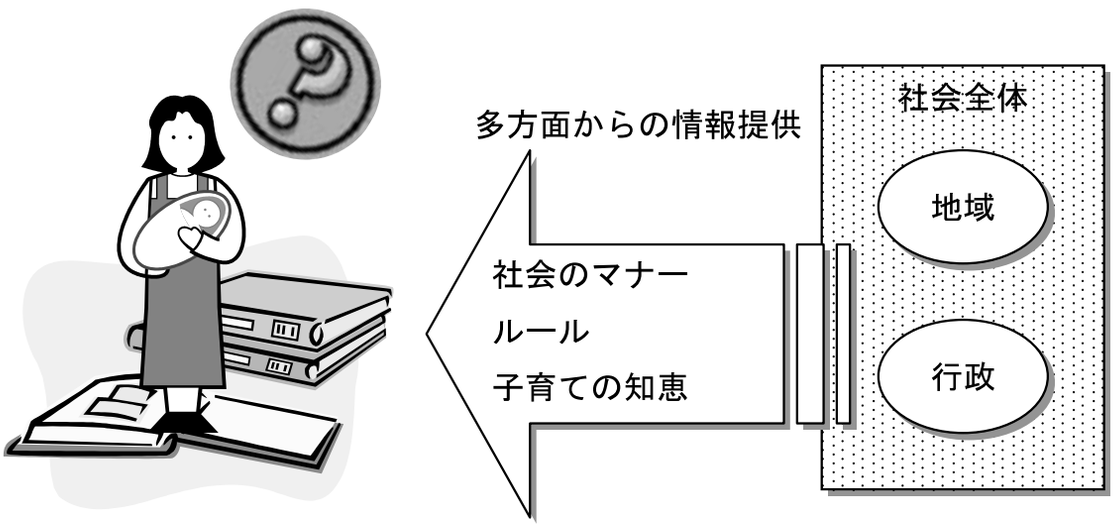
家族の形態も多様化し、また近年、おとなの「食」に対する考え方や感じ方の変化により、毎食家族全員がそろって食事ができる家庭は少なくなってきています。その結果、食の大切さや作法まで、学校で教えなければならない現状もあるようです。コンビニエンスストアやファーストフード店では、２４時間いつでも食べ物を買うことができる昨今であればこそ、青少年の健康を大切に考えていかなければなりません。さらに、ただ食べるだけでなく、食の日本文化や作法を次世代に伝えていくことも重要なことと考えます。飽食の時代、**「おなかがいっぱいになれば、とりあえずいいや」**などと考えていませんか。家族で、食べ物によって季節を感じたり、収穫体験によって自分で作った作物を口にすることで得るものは、ただ食欲を満たすという意味だけでなく、社会構造の一片を学ぶ良い機会となり、大事なことと考えます。

この項目の目指すところ

家族や友だちとのコミュニケーションの一環としての食が根付いている“ぶんきょう”

③「躾（しつけ）って　心と「身（からだ）」体を 「美」しく」

現代版「子育ての知恵袋」の活用



現状と必要性

社会の中で生きていくために身につけなければならない行動様式は、乳幼児期から段階をおって身につけていくものです。しかし、そのような行動様式に対する常識や知恵は、おとな各個人によって差があり、おとながどのような行動様式で躾を行うかによって、子どもの社会に対する意識が変わってきます。特に、第１子の子育ては迷い、悩みながらの躾だった人も多いのではないでしょうか。他人の子育てを目にする機会も減り、かつては親や、地域社会から学んでいたことも、本や雑誌からの知識しか得られない人も増えてきています。地域や行政からの実質的なサポートに加え、各方面から保護者への情報提供が大切と考えます。社会のマナーやルールを身につけるための躾は、家庭の中でだけで完結するものではありません。他人に迷惑をかけないように心がけるのは大切なことかもしれませんが、社会において誰にも迷惑をかけずに生きるのはなかなか難しいことではないでしょうか。**「助け合い」「お互い様」の気持ちで、思いきって誰かに頼ってみるのも悪くないのでは？**

この項目の目指すところ

社会のマナーやルールが、子育て中から子どもに身につくように、社会全体が知恵を貸すことのできる“ぶんきょう”

④「コミュニケーション＆スキンシップ」

家族との「心と体」のふれあい増加

現状と必要性

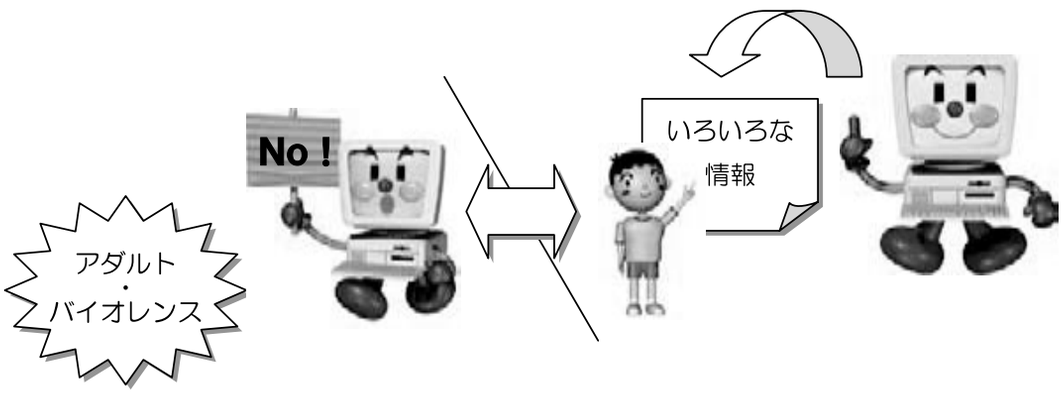
家族の存在は、青少年にとって心の支えです。時間に余裕がないと言われる現代社会において、**「ふれあいは量（時間）より質」**と考え、少ない時間であっても子どもとのふれあいを大切に考える必要があります。文京区では、平成３年８月に毎月第２日曜日を「家庭の日」と決め、啓発に努めていますが、もちろん、家庭の日にだけふれあえば良いというものではなく、普段から家族との会話（コミュニケーション）や体のふれあい（スキンシップ）が重要だと考えています。忙しさに追われる現代、月に一度の「家庭の日」には、意識して家族とのふれあいを見直す機会にしてほしいと考えます。また、家庭内でのお手伝いについては、現実には忙しさから子どもが出来るまで待っていられなかったり、危なくて手伝わせなかったりすることもあるでしょう。しかし、家庭の中での役割を持てば、子どもにとっても自分の存在意義を感じることができます。さらに、いつまでも「お手伝いをやらせる」のではなく、コミュニケーションの中で、**子どもの「手伝いたい」という積極的な気持ちを引き出すお手伝い**であってほしいと願います。

この項目の目指すところ

おとなの「忙しい」を理由にせず、たっぷりの愛情の中でひとりひとりが育っていく“文の京”の青少年

⑤「ＩＴ化　正しい知識　正しい判断」

利便性と危険性を自覚しての積極的なＩＴの活用



現状と必要性

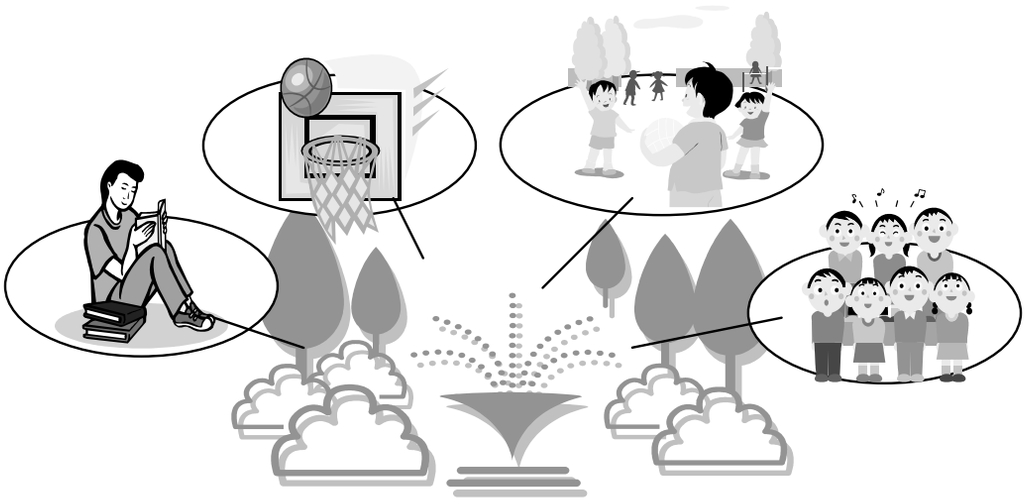
インターネットなどの通信技術を駆使して膨大な情報を得ることが可能となった現代、青少年に対しても、早期からコンピュータやインターネットに触れる機会を設け、次世代へ向けた教育が進められています。また、携帯電話の急速な普及については、青少年にとっても、大きな生活の変化をもたらしています。現代社会では、メディア･リテラシー（**①メディアにアクセスし、活用する能力②メディアを主体的に理解・判断する能力③メディアを通じてコミュニケーション、特に情報の読み手との相互作用的コミュニケーションを創りだす能力**）を身につけることが青少年健全育成においても重要であると言われていますが、様々なメディアの中でもインターネット等への知識を養うことが急務と考えます。しかし、パソコンや携帯電話に対する順応性は、総じて子どもたちのほうが高く、一方でおとなのほうでは、まだコンピュータなどを敬遠する人も少なくないのが現状です。青少年のＩＴ知識が、おとなよりも詳しくなっていることも考えられ、おとなが子どもに「教える」という図式が必ずしも成り立たない中で、青少年にＩＴ社会の仕組みや活用方法、あわせて危険性も伝えていかなければならないことは、非常に緊急性の高い課題です。青少年にとって有害な情報を遮り、便利さの中の落とし穴から青少年を守るのは、的確なおとなのサポートと、最後はまぎれもなく青少年自身であることを教えつつ、ＩＴを活用してほしいと考えます。

この項目の目指すところ

個々そして社会全体が、Ｗｅｂサイトのセキュリティを中から高にしていく意識を高め、アダルト・バイオレンス・風俗等から子どもたちに情報が入りにくい“ぶんきょう”

⑥「安らげる　私の居場所を　あちこちに」

「心と体」の居場所づくり



現状と必要性

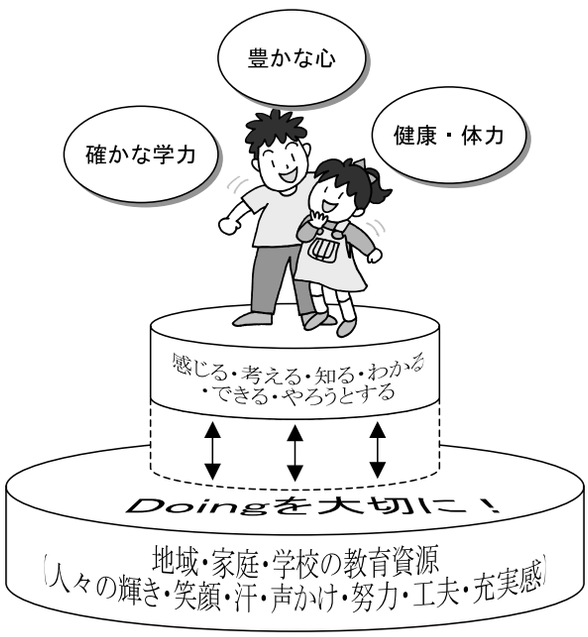
首都東京の中心に位置する都心区「文京区」では、今後、広大な公園や大規模な施設を新設することはなかなか難しい問題です。その中でも、子どもたちがのびのびと活動できる場を設けてあげたいという願いは今後も変わることはないでしょう。また、青少年にとっての居場所とは、ハード面での公園、施設だけではありません。ソフト面で見れば、青少年にとって話を聞いてもらえる場、発表する場など、自己の存在感を実感し、精神的な充実感を得られる場であれば、家庭や学校、友だちのいるところはどこでも、心の居場所と考えられるかもしれません。しかし、心の居場所であっても他人に迷惑をかける場であって良いわけはありません。青少年の「たむろ」問題で、「行き場がないからたむろする。だから施設や公園が必要なのだ。」という主張も一つですが、ただ眉をしかめるばかりでなく、「ここに集まったら迷惑がかかる」等の、おとな側のきちんとした説明が大切です。また、青少年が集まって「遊ぶ」場を考えるだけではなく、集まった若いエネルギーを社会貢献に向ける「場＝機会」などを作ることも考えられます。施設や場所の提供を考えるのはもとより、まわりのおとなが温かく、時には厳しく見守っている「空間」と「時間」を称した「居場所」が必要です。

この項目の目指すところ

青少年がいきいきと活動する空間と機会を、社会全体でつくる“ぶんきょう”

⑦「Ｄｏｉｎｇを　大切に！」

「勉強」「運動」「さまざまな体験」の意義を再認識



現状と必要性

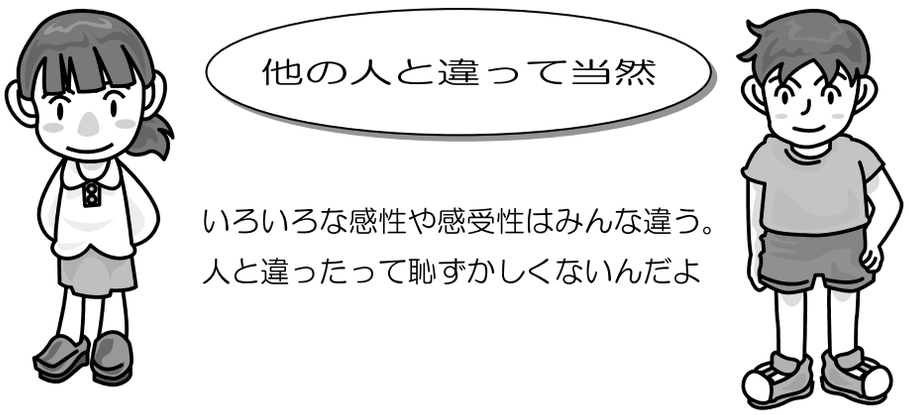
昨今、義務教育後、多くの人が高校や大学等に進学しますが、「みんなが行くから私も行く」と進学を希望する子どもや、社会で出世するために良い学校への進学を勧める保護者が多いのも現状です。その教育費負担はほとんどが保護者の肩にかかる中で、「なぜ、勉強するのか」、「これは将来何の役に立つのだろうか」という疑問をもち、「勉強」「運動」「さまざまな体験」に意味を見出さなくなってしまう青少年も少なくありません。学校に限らず、「勉強」「運動」「さまざまな体験」をする**意義を社会全体において青少年が見つけられるような機会**としてほしいものです。特に、「さまざまな体験」をして、社会に出て行くことは、その後の人生においても、必ずプラスとなると考えられます。座っているだけでは得がたい経験を現実の場で、ふれあい、感じることが大切です。最終的には、学校やまわりのおとなから薦められて取り組むことから、自分の考えで本当に興味を持って積極的に取り組むことがきるようになってほしいと考えます。青少年が自らの生き方や将来に対する夢・目的意識について考えるなどのきっかけを多く与えていきたいものです。

この項目の目指すところ

生きる力をつけるために、自らが学び、体を動かし、多くの体験をする“文の京”の青少年

⑧「感動で　涙が出ること　ありますか？」

豊かな感受性と表現力の育成



現状と必要性

「さまざまな体験」の中でも、特に心を動かされる感動を子どもたちに多く体験してほしいと考えます。ゲームやコンピュータの世界で学び、遊ぶ時間が多くなっている青少年にとって、現実の社会の中で体験したり感動したりすることは欠かせません。また、現実の社会には、楽しいことや嬉しいことばかりでなく、時には悲しみや怒りがあることも体験し、またそれをも乗り越えていく力をつけることも社会で生きていく上で必須であると考えます。また、あわせて素直な気持ちをそのままあらわすことができる表現力も身につけてほしいと考えています。現代の青少年は、感想を聞かれると何でも「すごかった」を繰り返す傾向があるようです。「すごく」楽しかったのか、「すごく」驚いたのか、「すごく」かっこよかったのか…。感動体験をもとに、冷静に自分の気持ちを見つめ、表現できる力をつけることは、とても重要なことと考えます。

この項目の目指すところ

素直に感動できるとともに、感情の変化に対し「キレ」たりせず、落ち着いて自分を表現できる“文の京”の青少年

⑨「いいんだよ　おとなになるには　悩むんだ」

事前の知識提供と相談体制の充実

現状と必要性

青少年が「社会」の中で生きていくためには、おとなの側からの、「自立」へのサポートとして、社会を生き抜く知恵や危険をあらかじめ教えてあげることが重要です。青少年が自立して生きていくとは言っても、成長する間には、知らなければならないこと、気をつけなければいけないことがたくさんあります。ただし、おとなからの押し付けや規制という形ではなく、**知識を与えたうえで、青少年自ら危険を回避できる力をつけることが必要です。**

一方、青少年が成長し、「自立」していく過程では、悩みをもつことは当然のことです。**おとなになって振り返ってみれば「大したことなかったなぁ」と思うことも、青少年にとっては、深刻な問題**であることも多いものです。誰しもが経験していく道ですから、些細な悩み・大きな悩みと区別せず、どんな相談にも真剣に対応していかなければなりません。また、悩みに対する答えを見つけるのは青少年自身ですが、ヒントやアドバイスを与えることができるのは、専門の相談員とは限りません。実際、青少年の悩みの相談相手は、友だち、家族が多いですし、学校の先生や先輩、近所に住む仲の良いお兄さん・お姉さんやおじさん・おばさんなど、相談できる相手が身の回りに多くいると思えるだけでも安心して成長できることでしょう。

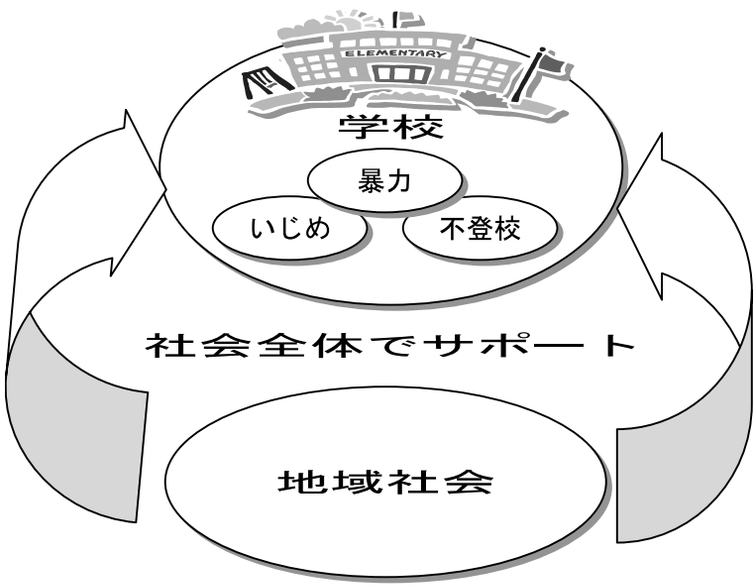
この項目の目指すところ

事前の知識提供を活かし、危険を回避できる“文の京”の青少年

悩める青少年に対し、多方面から心の支えになりうる“ぶんきょう”

⑩「わがまちの　学校みんなで　見守って」

学校を中心に起こりうる青少年の現代的問題への取り組み



現状と必要性

良い学校へ通うことが、社会においてより良い地位につくための近道であると言われる風潮により、受験競争はとどまることを知りません。一方で、ゆとり教育についても評価がわかれ、保護者の気持ちの間にも矛盾が生じるようになっています。合格することが最終目的である場合、「学ぶ」ことへの意欲が高いとは一概には言えない場合も、合格してしまえば、学力は高いと思われる人が、一般常識に欠けていたり、精神面での自立が伴わない、という問題も各年代で指摘されています。子どもの幸せを願う親や学校だけでなく、社会における一人ひとりが、さまざまな立場でこの問題について考え、取り組んでいく必要があると考えます。

また学校は、社会性の育成や生涯を通して学び続けるための学力を育てる学習支援の場として、重要な意義・役割があります。その中で、学校生活に起因する問題の解消に努力が必要です。特に、いじめ・不登校・校内暴力といった問題は、昔からある問題とはいえ、現代の傾向は必ずしも昔のものと同じとは言えません。古くて新しい問題として、学校だけでなく、まわりのサポートも欠かせません。青少年にとって、安心して通うことができる学校を社会全体で目指すことが必要です。

この項目の目指すところ

学校を中心に起こる問題に対しても、社会全体で取り組む“ぶんきょう”

⑪「子どもたち　地域にとっても　宝物」

青少年を育む環境（まち）づくり

青少年が安心して、健やかに成長することのできる地域環境づくり

現状と必要性

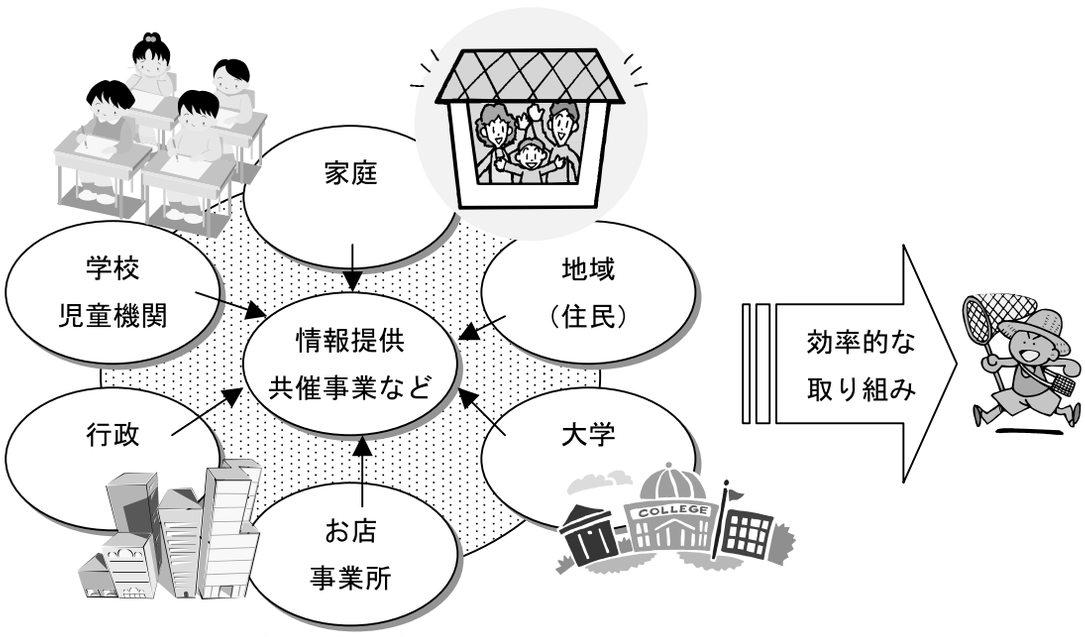
まさに子どもは次代を担う宝であり、社会全体で育てていかなければならないという意識は、特に青少年に直接関わりがない時期の人々にも強く持ってほしいことです。青少年にとって、血のつながった親の愛情はもとより、**「自分を見守ってくれる人が社会のあちこちにもいるんだ。」**と感じることは、とても大事なことです。地域社会の役割は、青少年を直接サポートすることばかりではありません。青少年が安全に安心して暮らせる環境（まち）をつくることも、社会の中で青少年を育てる意識として重要な課題です。青少年の自主性を尊重しつつ、安心して遊べ、育つ環境（まち）づくりは、決して青少年のためだけではなく、社会全体としても明るい社会となっていくはずです。

この項目の目指すところ

直接的、間接的に、子どもたちを見守り育てる“ぶんきょう”

⑫「取り組みも　悩みも共に　助け合い」

青少年を見守る社会の連携強化



互いに尊重しあい連携を強化

現状と必要性

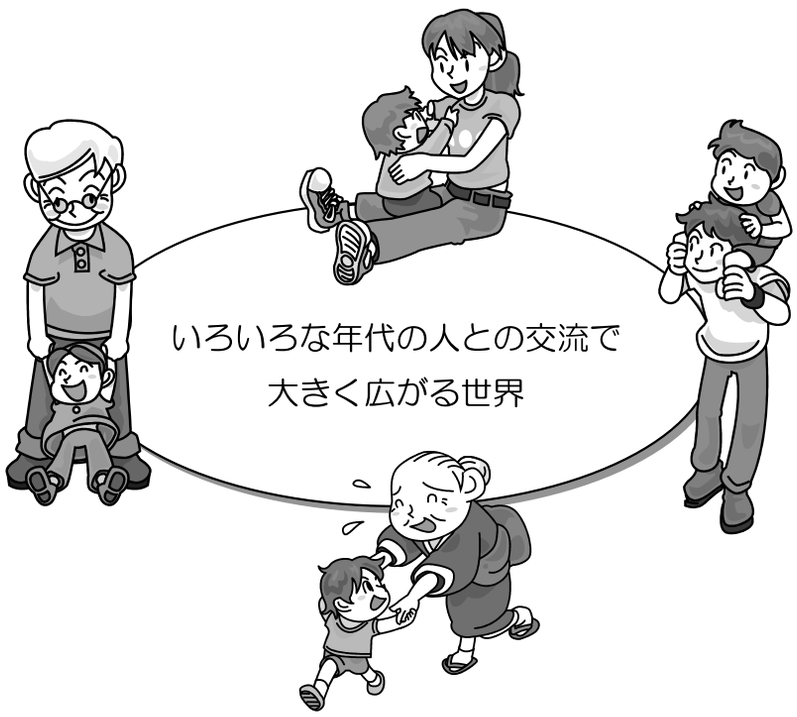
青少年の健全育成に関わる機関の連携は、社会全体での青少年健全育成を進める上において欠かすことはできません。学校はじめ、児童施設や健全育成を目的とした団体は現在でも数多くあり、取り組みも、多方面からさまざまなことがなされています。しかし、同時期に同じような行事を別々の主催で行って、参加者を取り合ってしまったり、広報がうまくなされず、時期を過ぎてから行事を知り、残念がる家族もいるようです。青少年のために、というそれぞれの思いを尊重しつつ、協力しあっての事業実施が望まれます。特に学校との連携は、子どもたちに社会との結びつきを強めるような機会を広げ、あるいは、学校外の多くの人材の協力によって、多様な学習の機会を広く与えることができます。また、連携することは、青少年の些細な変化を見逃さず、大きな事件になる前に救ってあげることができるのも、大きな利点です。

この項目の目指すところ

各関係機関がそれぞれに尊重しあい、協力・助け合える“ぶんきょう”

⑬「年齢も　立場も違えば　広がる世界」

年代の離れたさまざまな立場の人との交流を促進



現状と必要性

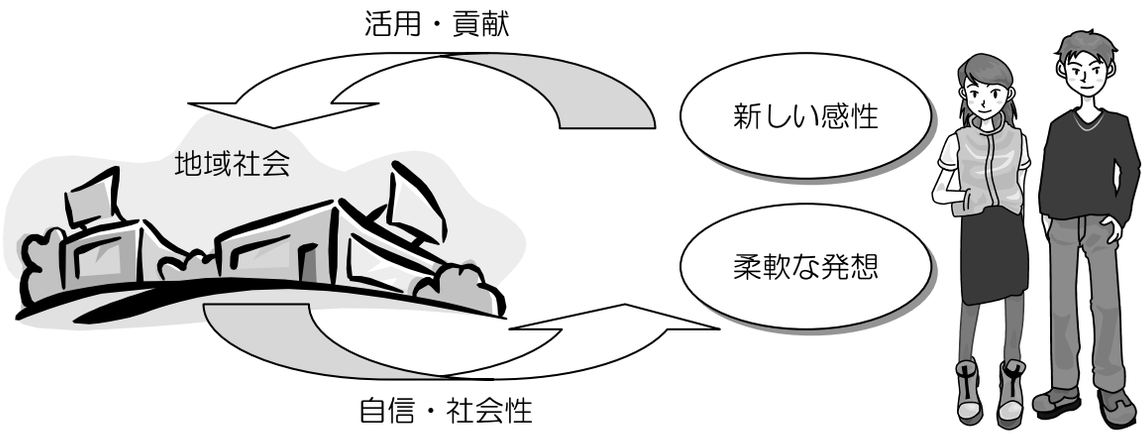
核家族が増え、兄弟の数も減っている現代、青少年が社会に出るまでに普段接する人は、親・兄弟・学校の先生・同級生・１～２学年離れた先輩・後輩…がほとんどでしょう。つまり、積極的に異年代交流をしなければ、おとなといえば、親か先生しか知らず、それ以外には、ほぼ同年代としか交流がないということになります。異年代交流をすることは、社会に出る前に、いろいろな年代のいろいろな考え方を持つ人がいることを知り、自分の生き方の参考としたり、自分よりも下の年齢の人を面倒みたり、そのような中で協力し活動することも覚えていける場となります。ボランティア活動などで、高齢者や赤ちゃんと接する機会だけでなく、小学生にとっては中学生が、中学生にとっては高校生が、高校生にとっては大学生以上の青年があこがれのお兄さん・お姉さんであったりします。団体活動や地域の行事などにおいて、積極的に異年代交流の場をつくることが必要と考えます。

この項目の目指すところ

異年代交流を通して、自分の生き方を見つめなおす“文の京”の青少年

⑭「若者力　社会に活かす　チャンスをください」

可能性を秘めた若い力の採用と積極的な社会への貢献



現状と必要性

青少年が社会にふれあう場や機会があることはとても重要なことです。しかも、ただ参加するだけではなく、社会の中で自分が認められ、力を発揮した経験は、青少年にとって大きな自信につながることだと考えます。おとなが青少年のために多くの行事を用意することは大切なことですが、時代の変化とともに、おとなの押し着せになってしまう可能性もありえます。青少年を企画や運営主体に取り込むことは、ある意味時間がかかり遠回りで、心配する部分も多くなるかもしれませんが、おとなでは考えられなかったような柔軟な発想による事業も見込め、同年代の参加する意欲にも効果があり、そして何より、青少年自身が大きく成長することでしょう。

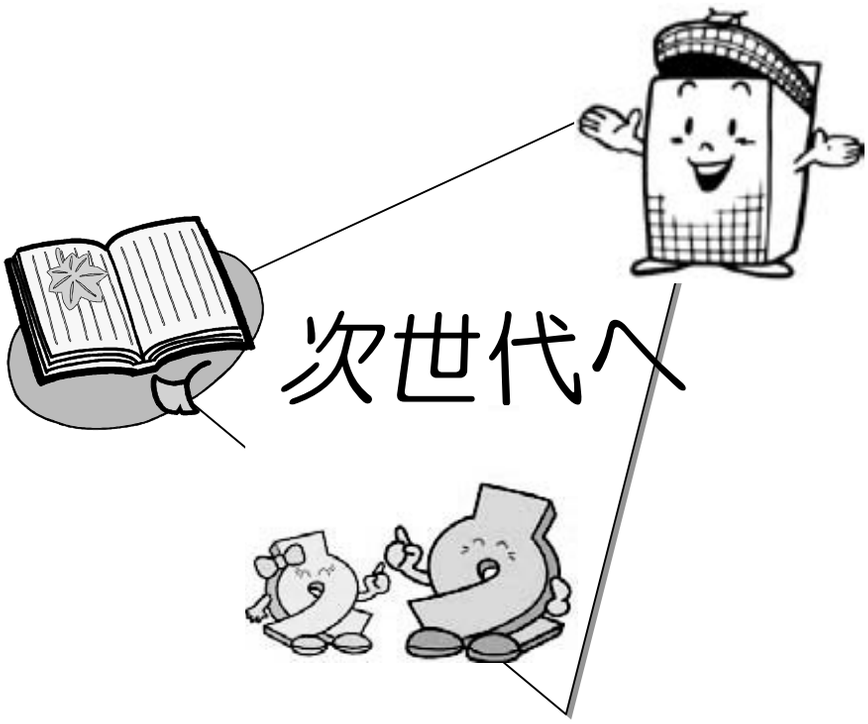
また、青少年がボランティア活動等を通して社会に貢献することは、社会の仕組み、場、ルールを学ぶ機会ともなります。青少年の頃から、社会において自らが出来ることを考え行動することで、これらの青少年が成長し、社会を担う頃には、社会全体があたたかいものになると考えます。

この項目の目指すところ

社会の一員であることの自覚を持ち、自らが出来る社会貢献を見つけ、積極的に行動していく“文の京”の青少年

⑮「いつまでも　私のふるさと　文京区」

「文の京」の地域文化を次世代へ伝承



現状と必要性

文京区は、大学をはじめ、学校が多く点在する文教地区であり、また、古くより多くの文人たちが住んで芸術・文化作品を残した地域性があり、まさに「文の京」です。区内には、史跡や文人ゆかりの地が多く残っており、文京区で育つ青少年には、その時々においてその歴史を学んでほしいものです。また、ただ歴史を学ぶだけにとどまらず、将来の「文の京」の担い手として、文京区の文化を後世に伝えてほしいとも考えます。

美しい日本語を駆使し、優れた作品を残した先人たち…。その地に生まれた「文の京」の青少年には、特に、普段から時と場に合わせた美しい言葉づかいを使うことができる人になってほしいと願います。

この項目の目指すところ

ふるさと「文京」を誇りに思う“文の京”の青少年